HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国共産党を”熱愛”したチベット仏教の高僧
Author(s)	川田, 進
Citation	連環画研究, 10, 108-127
Issue Date	2021-09-30
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98498
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98498
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_10_108-127.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『連環画研究』第 10 号　2021 年 9 月

中国共産党を“熱愛”したチベット仏教の高僧

川田 進

1．絵本『格達活仏』に描かれたゲダ 5 世の生涯

軍人と高僧の“ひそひそ話”

1999 年、四川民族出版社から『格達活仏』という絵本が出版された。表紙には、二人の男が茶を飲みながら膝を交えて談笑する姿が描かれている。その姿は微笑ましく見えるが、どこか不自然さが感じられる。軍服姿で脚絆を巻いた男は、1927 年に中国共産党が組織した中国工農紅軍（以下紅軍）を率いて長征途上の朱徳（1886-1976）である。袈裟をまとった男は、チベット仏教ゲルク派・白利寺の高僧格達5 世（1903-50、以下ゲダ 5 世またはゲダ）である。

図 1　『格達活仏』（文：鄧珠拉姆、絵：馬暁峰・朗加、B5 版）。ハトはチベットに“平和”をもたらすべく尽力したゲダ 5 世を称える役割と考えられる

二人が出会ったのは 1936 年、国民党軍との交戦に疲弊し迷走を続ける紅軍部隊が、空腹を抱えながらチベット人が暮らす甘孜（現在の四川省甘孜チベット族自治州甘孜県）という町にたどり着いた時だ。

ゲダ 5 世が甘孜の有力者だと知った朱徳は、「わしらは“三大紀律・八項注意”［紅軍時代の軍紀］を守る中国共産党の軍隊じゃ。他人のものは針一本、糸一筋たりとも奪いはせぬ。国民党の兵士と一緒にするなよ。実は困ったことがあって相談に来た。腹が減っては国民党軍を相手に戦ができぬ。すまんが、飯を分けてくれ。銭はちゃんと払うから」と、四川訛りの漢語で唾を飛ばしながらまくし立てた。ゲダ

5 世は「紅軍は野蛮で残忍な連中だと聞いていましたが、あれは国民党が流したデマのようですね。中国共産党が掲げる信教の自由や民族政策の理念に納得しましたので、食糧をお分けします」とチベット語カム方言で丁重に答えた。この時、朱徳はゲダの知的で献身的な姿に心を打たれ、ゲダは朱徳がもつ豪快で竹を割ったような性格に惚れ込んだのである。通訳を介して二人はいつの間にか意気投合し、やがて義兄弟の契りを結んだとか。ただし、二人のこの“会話”は絵本『格達活仏』からの引用ではなく、中国国内で公表された論文や紹介記事（[順書 2019] 他）を参考にして、筆者が二人の交流を“再現”したものであるため、事実と虚構が交錯していることを断っておく。

一癖も二癖もある中国共産党を“熱愛”し、一筋縄ではいかない中国共産党への支援を約束したチベット仏教の高僧がいたと聞いて、中国通の読者は違和感を持つことだろう。絵本の表紙は、中国共産党が「長征勝利五十周年」を記念して制作した塑像を基に描いたものである[1]。塑像の制作者はプロパガンダ芸術を担う四川雕塑芸術院（四川省文化庁直属機関）であり、政治臭を放つその塑像は「朱徳総司令とゲダ 5 世記念館」（甘孜県）に設置されている。

朱徳はなぜ高僧に接近し、何を依頼したのか。ゲダ 5 世は本当に中国共産党を熱愛したのか。筆者はこれまでゲダ 5 世を中国共産党に利用された悲劇の高僧と考えてきたが、その後の調査によりゲダ 5 世像を修正する必要が生じた。そこで、本稿はまず絵本『格達活仏』からゲダ 5 世の一生を紹介した後、中国共産党とチベット仏教の高僧をめぐる複雑怪奇な物語を紐解き、新たなゲダ 5 世像を提示することを目的とする[2]。

農奴の子が突然、高僧に

清朝末期の 1903 年（1902 年説もあり）、現在の四川省甘孜チベット族自治州甘孜県徳西底村の農家に男子が誕生した（『格達活仏』1 頁）。幼くして父を亡くしたその子は、2 歳で村の寺院に預けられ、7 歳の時に仏のお告げにより白利寺の化身ラマ（チベット語：トゥルク、漢語：活仏）に選ばれてゲダ 5 世を名乗った（2 頁）。つまり、ゲダ 4 世が圓寂（逝去）した後、その男の子が 4 世の生まれ変わりと認定されたのである。チベット仏教の高僧は死後自分の意識を幼児に転移させ、民衆を救済し続けるため、重い任務を背負ったゲダ 5 世には優秀な家庭教師がつけられ、英才教育が施された。

ラサで学問と修行の日々

ゲダ 5 世は 17 歳の時、故郷を離れてラサにあるゲルク派の総本山甘丹（ガンデン）寺の門をたたき、8 年間、師僧から主要経典の講義を受けつつ、医学、暦学、土木建築学、文学など多方面の学問を熱心に修めた。やがて厳しい修行が実を結び、25 歳の時に最高学位であるゲシェ・ラランパ（チベット仏教学博士に相当）を取得した後、白利（ペーリ）寺へ戻ってきた。チベット医学の知識を活かして病人を助け、孤児や老人を寺で養い、児童の識字教育にも力を注ぎ、土木や建築の技術指導も率先して買って出た。こうして若き高僧は多くの信徒から尊敬を集め、白利（ペーリ）寺は地域を守り支える寺院として期待された（3–4 頁）。

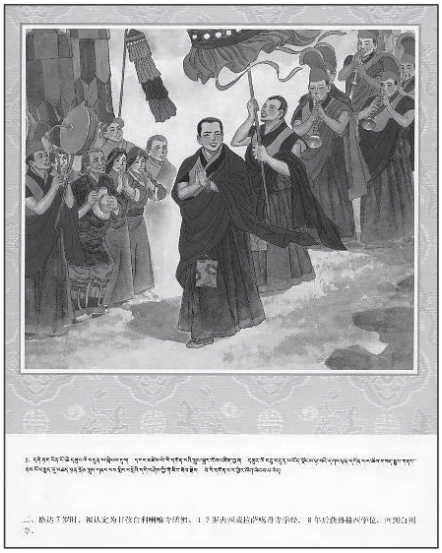

図２　各頁のキャプションは漢語とチベット語を併記。チベット仏教の僧衣は緋色。ゲルク派は黄色の帽子をかぶるため、漢語では「黄帽派」と呼ばれている（2 頁）

“悪魔”の紅軍がやって来た

ゲダ 5 世が故郷の寺に戻ってから数年の間、平穏な日々が流れたが、1936 年の春、風雲急を告げる事態が発生した。中国共産党の紅軍部隊が甘孜（カンゼ）にやって来たのである。紅軍が到着すると、町はひっそりと静まりかえり、人影はまばらであった。この地域に暮らすチベット人の大半は、山中に身を隠していた。国民党の蒋介石が送り込んだチベット仏教の高僧の手下たちが、紅軍より先に甘孜（カンゼ）一帯の村々に入り、紅軍を貶める情報をばらまいたからだ。「紅軍は人殺しだ、火を放つぞ。紅軍に食糧を売るな。道案内もするな。さあ、山へ逃げろ！」（5 頁）。

図３　甘孜に到着した紅軍部隊。チベット仏教ゲルク派の甘孜寺が丘の上から町を見守っている（6 頁）

紅軍がチベット人に宣伝活動

第四方面軍を率いる朱徳は、現地のチベット人が紅軍を怖がっているのを見て困惑した。朱徳は甘孜（カンゼ）に留まり、疲弊した兵士を休ませ、当面の食糧や生活物資を調達することを考えていたからだ。そして、雲南から北へ移動中の紅二軍・紅六軍と合流した後、毛沢東の部隊がいる陝西省北部を目指して北上する腹積もりであった。

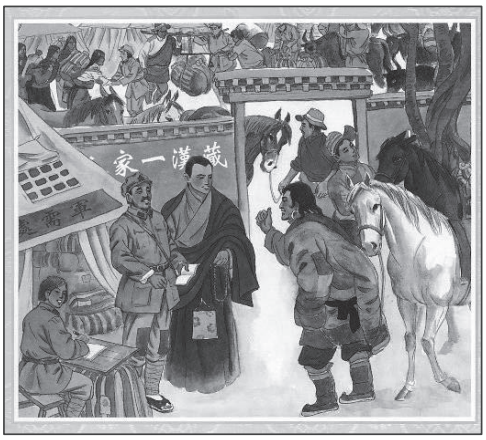

図４　現地のチベット人はガウン風の民族衣装チュパを着用。紅軍は医療や衛生の啓蒙活動を行った（7 頁）

このままでは 4 万の兵が飢えてしまう。山中に逃げ込んだチベット人を安心させることが先決だ。紅軍はただちに中国共産党の宗教政策や民族政策の宣伝活動にとりかかった。兵士が村々に分け入り、医療や衛生に関する啓蒙活動も行い、チベット人を安心させることに努めた。この時ゲダは秘かに紅軍の動向を探るよう弟子に命じたところ、紅軍は規律を重んじ、売買取引をごまかさず、宗教を尊重し、チベット人に危害を加えないことがわかったため、山中に隠れた農民に村へ帰るようにと指示を出した（6 頁）。

朱徳が白利（ベーリ）寺のゲダ 5 世を訪問

朱徳はチベット人の協力を得るには彼らが尊敬してやまない高僧の力を借りるに限ると判断した。

紅軍と寺院を結ぶ役割を担ったのは、紅軍総政治部の大物幹部・陳昌浩（1906-67）であった。陳は甘孜（カンゼ）寺や白利（ベーリ）寺の高僧と協議を重ねて、紅軍と両寺院の間で「互助条約」[3]を結ぶことに成功した。スローガンは「チベット振興と打倒蔣介石」。条約の骨子は、紅軍がチベット人自治政府（波巴（ボバ）政府）の設立を支援するかわりに、寺院が紅軍に食糧を援助することであった。紅軍はすぐさま白利（ベーリ）寺と尼寺を保護する「布告」[4]を

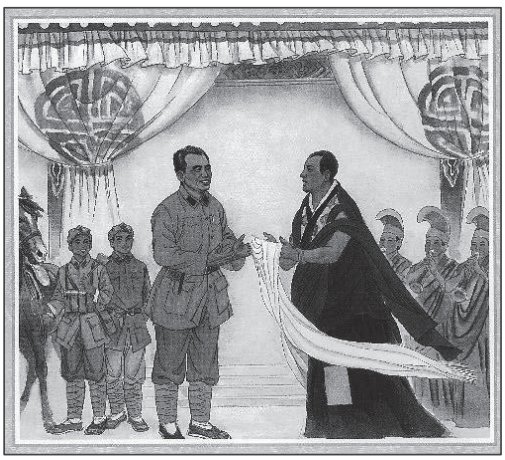

図５　ゲダは客人の朱徳にカタ（白いスカーフ）を渡し、チベット式の敬意を示した（8 頁）

出し、僧尼と農民の不安を取り除く作戦に出た。

部下の下準備を受けて、いよいよ「紅軍の父」と呼ばれた朱徳が白利（ベーリ）寺に出向き、ゲダ 5 世と話し合いを重ねた。この時、朱徳は焦っていた。大部隊の食糧、燃料、生活物資を確保しなければならないからだ。朱徳はゲダに熱く語った。「中国共産党はチベットの宗教を尊重し保護する。そして、チベット人のための自治政府の設立を応援する。紅軍はチベット人の味方だ。ワシを信じてくれ」。ゲダは軽くうなずき、「わかりました。しっかりお手伝いします」と答えた（8 頁）。

高僧が波巴（ボバ）政府の副主席になる

長征の途上、食糧確保は常に一大問題であった。空腹に耐えかねた紅軍兵士は、ある時は野草、草の根、樹皮を食べ、またある時は革のベルトや馬の鞍を煮て口にねじ込んだ。朱徳が滞在する甘孜（カンゼ）で、食糧を備蓄し売買を取り仕切っていたのは、土司（どし）（中央政府が地方官に任命した地元のチベット人豪族）や高僧である。

図 6　朱徳は波巴人民共和国の成立大会で弁舌をふるったと伝えられているが、甘孜に滞在中の朱徳の行動には不明な点が多い（9 頁）

紅軍の要請を受けて、ゲダは麦や豌豆、牛や馬を用意し、通訳や案内役も手配した。紅軍への支援の輪は近隣の寺院や農民にも広がり、今後の北上計画に備えていた紅軍部隊は、食糧や物資の確保に安堵した。

一方、紅軍は先の「互助条約」第 1 条に掲げたチベット人の自治政府を作る準備を急ピッチで進めた。そして、1936 年 5 月 1 日、紅軍は甘孜（カンゼ）で「波巴（ボバ）人民共和国」の成立を高らかに宣言した（チベット語の波巴は「チベット人自身」の意）。成立大会には近隣の 16 県から約 700 人の代表が集い、朱徳が壇上でスピーチを行うと、チベット人は自治政府の誕生を祝福する歓声を上げた。そして、ゲダ 5 世が甘孜（カンゼ）県波巴（ボバ）政府の副主席に選ばれた（9 頁）。

朱徳、ゲダに別れを告げる

朱徳は食糧を確保し、波巴（ボバ）人民共和国の誕生を見届けた後、紅二軍と紅六軍が甘孜（カンゼ）に到着するのを待った。そして甘孜（カンゼ）での滞在から 4 ヶ月後、朱徳の第四方面軍

は合流した部隊とともに北上する決断を下した。いよいよゲダとの別れの日がやって来たのである。

朱徳「ワシらの部隊はこれから北上する。ゲダさん、いろいろ世話になった。波巴人民共和国のことを頼んだぞ。記念にワシの軍帽を贈る。ワシらの軍隊は、10 年後、あるいは 15 年後に必ず甘孜に戻ってくるからな」。

ゲダ「朱徳さん、別れはつらいですね。食糧や鍋釜を準備しましたから、持って行ってください。御仏が紅軍をお守りします。再会を楽しみにしていますよ」（11 頁）。

図 7　紅軍部隊が出発の時、朱徳はゲダと再会を誓う（11 頁）

国民党軍の襲来

甘孜を離れる際、朱徳はゲダに紅軍の傷病兵数百人を託した。僧や村人が傷ついた兵士の介護をしていたところ、国民党軍が襲いかかってきた。ゲダは大急ぎで兵士をチベット服に着替えさせて、近隣の町へと避難させた（13–14 頁）。国民党の軍人は「共産党を捨てて、国民党に入れ」と迫ったが、ゲダは断固拒否した［甘孜日報 2016］。こうして国民党軍の襲来により、波巴人民共和国は瞬く間に崩壊し、身の危険を感じたゲダは、共和国の印章を携えて、やむなくラサへと避難した。

14 年後、ゲダが共産党軍と再会

1949 年 10 月 1 日、毛沢東が天安門の楼上から中華人民共和国の成立を宣言した。この知らせを耳にしたゲダは、即座に従者を北京に派遣し、「チベットの平和が早期に実現することを願う」というメッセージを毛沢東と朱徳に届けた（18 頁）。

翌年の 1950 年 3 月、中国共産党はチベットへの本格的な進軍に備えて、第 18 軍北路先遣部隊に予備調査を命じた。4 月末、先遣部隊が甘孜に到着すると、ゲダ 5 世が出迎えた。第 18 軍の幹部は、中国共産党がチベットを英米帝国主義勢力から解放するためにやって来たことを伝えた。

絵本『格達活仏』は、政治的背景の説明を省略しているため、ゲダへの交渉役と通訳を担当したチベット人幹部・天宝に関する文献から、当時の緊迫した様子を以下に“再現”する［楊飛 2010：37］。

ゲダ「朱徳と別れて 14 年後、中国共産党の軍隊は約束どおり甘孜（カンゼ）に帰ってきましたね。皆さんが進軍する前に、私が先にラサへ行きチベット解放に向けた協議をしてきます」。

第 18 軍幹部「毛沢東や朱徳がゲダさんとの面会を希望しているので、先に北京へ行ってくれないか」。

ゲダ「お気持ちはうれしいですが、私はチベット解放を優先させます。チベットは中国の領土なのですから。チベット政府との交渉は、私に任せてください」。

図 8　朱徳の“約束”どおり、中国共産党の軍隊が甘孜に戻ってきた（19 頁）

ゲダ、何者かに暗殺される

ゲダは朱徳の承諾を得た後、中国共産党の使者としてラサを目指した。金沙江（現在のチベット自治区と四川省の境界となる川）を渡り終えると、その先はダライ・ラマ政権の支配地であった。ゲダ一行は、村々で中国共産党の宗教政策や民族政策の宣伝を行いつつ、昌都（チャムド）という町に到着した。この時ゲダ一行を待ち受けていた昌都（チャムド）の統治責任者拉魯（ラル）総管（1914-2011、以下ラル）は、中国共産党の使者であるゲダにラサへの通行を禁止すると告げた（23 頁）。困り果てたゲダは帝国主義分子（チベット政府が雇ったイギリス人通信技師）が管理する無線所へ行き、ラサとの通信を試みたが失敗に終わった。

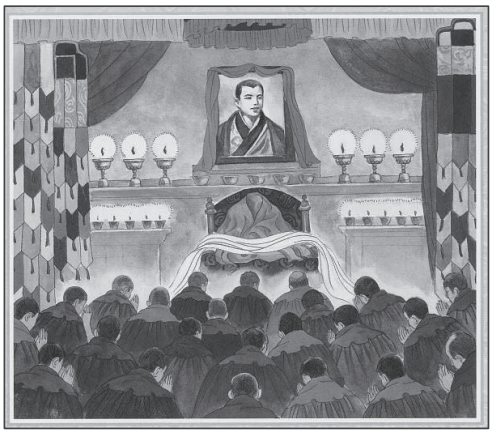

図 9　ラサへ向かった師僧ゲダの死を悲しみ読経を行う白利寺の僧たち（25 頁）

絵本『格達（ゲダ）活仏』は読者である児童への配慮から、ゲダ殺害の一件に触れず、「憤怒の情により体調を崩し、旅の疲れが重なり死亡」とあいまいな記述をしているが、大人の読者はキャプションの「昌都（チャムド）当局の少数の反動分子と帝国主義分子」（23-24 頁）が殺害に関与したことを読み取ることができる。

ゲダ、チベット解放に尽力した英雄になる

ここで、絵本『格達活仏』に記述されていない中国共産党の軍事行動について説明を加える。

「ゲダ 5 世 8 月に昌都で逝去」の訃報が、行商人を通じて甘孜の北路先遣部隊にもたらされた。ゲダが住持を務める白利寺では、悲しみの涙にくれる僧侶が丁重に読経を続けた。

図 10　ゲダの死を悼み、北京からやって来た慰問団が、毛沢東のメッセージを白利寺と遺族に届けた（25 頁）

中国共産党はチベット解放の任務を委ねた特使ゲダ 5 世がチベット政府とイギリスを中心とする帝国主義勢力の手先に“殺害”されたことを確認すると、10 月、第 18 軍にダライ・ラマ政権の軍事要衝である昌都攻撃を命じ、一気に陥落させた。ゲダ“殺害”事件の報告が党中央に届くと、11 月に中国共産党西南局の鄧小平は重慶で、第 18 軍は甘孜で厳かにゲダ 5 世の追悼会を開催した。

絵本では、チベット解放の実現に向けて尽力したゲダ 5 世の愛国的行動と民族団結の姿勢を称えるため、北京から派遣された慰問団が毛沢東のメッセージを携えて甘孜にやって来た。

朱徳総司令とゲダ 5 世記念館

ゲダの逝去から 46 年後の 1996 年、ゲダの故郷である甘孜の町に「朱徳総司令とゲダ 5 世記念館」がオープンした。玄関ホールには、やや固い表情で談笑する二人の塑像が設置され、台座には江沢民の筆で「一九三六年朱徳ゲダ活仏に会見」の文字が彫り込まれた。

その後、記念館は軍人と高僧の友情、民族の融和、革命への貢献、長征の輝かしい勝利といった要素を盛り込んだ愛国主義教育の拠点として活用されることになった（29 頁）。

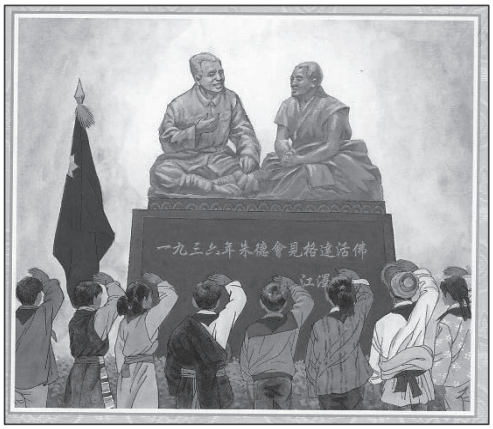

図 11　紅いスカーフを巻いたチベット族の少年先鋒隊員が熱心に愛国主義教育を受けている（29 頁）

２．ゲダ５世と中国共産党をめぐる虚実

ゲダ５世に関する記録は存在するのか

中国共産党に信頼を寄せ、朱徳と深く交わったとされるゲダ５世は実在したのであろうか。図 12 はチベット解放の任務を担った中国人民解放軍第 18 軍兵士が撮影したゲダ５世（1950 年）である。そして図 13 は、1950 年にゲダ５世が圓寂した後、新たな化身ラマに選ばれたゲダ 6 世（1952-）であり、毛沢東の時代に還俗（僧が俗人に戻る）と妻帯を強制された辛い過去を持つ。5 世の写真が存在し、6 世が選ばれた事実から、ゲダ５世は実在したと考えるのが妥当であろう。ゲダ５世が住持を務める白利寺（図 14）を筆者は 2005 年に訪問したことがある。

図 12　第 18 軍兵士と語らうゲダ５世を撮影した貴重な写真（1950 年）［周錫銀 2012：口絵］

図 13　筆者は 2005 年にゲダ 6 世を訪問。自宅には劉延東（当時国務院副総理）に面会した時の写真が掲げられていた（2005 年筆者撮影）

ゲダ５世はチベット仏教の主要経典を修め、最高学位を取得し、医学や文学等、世俗の学問にも通じた知識人であることは間違いない。ただし、絵本『格達活仏』に描かれた「紅軍を助け、チベット解放に尽力した英雄ゲダ５世」像は、中国共産党の歴史観が強く反映されたものであり、ゲダ 5 世の宗教活動や中国共産党との交流に関する本人の手記や親族の証言を確認することができない以上、ゲダ５世の実像を明らかにすることは容易でない。

朱徳はゲダ５世と交流したのか

『紅軍長征史』によれば、1935 年 3 月～6 月頃、第四方面軍と朱徳は現在の四川省炉霍県や甘孜県の周辺に滞在していたことがわかる［中共中央党史研究室第一研究部編 2006：323-327］。そして、当時この地域における中国共産党の最高指導機関である中共川康省委員会が炉霍県に設置されたことから、朱徳の活動拠点は主に炉霍にあ

り、必要に応じて約 100 キロメートル北に位置する甘孜（カンゼ）に馬で移動していたと考えられる。

朱徳は当初、チベット人から食糧と生活物資を確保した後、直ちに部隊を北上させる心積もりであったが、甘孜（カンゼ）方面を目指して移動中の部隊（紅二軍、紅六軍）との連携を重視し、両軍と合流した後に北上する方針へと変更した。

甘孜（カンゼ）周辺に滞在した 3、4 ヶ月間の朱徳の行動を記した主要な資料は『朱徳年譜（新編本）』である。ただし、具体的な行動の記録は少なく、主に他の部隊との間で頻繁に交わされた通信記録が中心である［中共中央文献研究室編 2006:560-570］。海抜 3000 メートルを超えるチベット人居住地区に滞在し食糧不足に苦しむ中で、朱徳の詳細な行動記録を残すだけの余裕が部隊になかったのか、あるいは記録は存在するが政治的な事情（後述する波巴（ボバ）人民共和国や張国燾との関係）により非公開なのか、理由ははっきりしない。

図 14　ゲダ 5 世が住持を務めた白利寺の中に、ゲダ 5 世顕彰記念室が設置されている（2005 年筆者撮影）

では、朱徳はゲダ 5 世と本当に 9 回[5]も面会し、義兄弟の契りを結んだのであろうか。残念ながら二人の交流を示す文献や写真は公開されておらず（あるいは存在せず）、『朱徳年譜（新編本）』にも面会記録はない。しかし、朱徳はゲダ 5 世を訪問する必要があり二人は接触したと筆者は考える。その根拠は、部隊の北上に備えて数万の兵の食糧と生活物資を確保しなければならなかったからだ。当時、甘孜（カンゼ）や炉霍（ダンゴ）等、チベット人居住地区を支配していたのは地元の有力者である土司と寺院の高僧であり、寺院は宗教活動のみならず経済活動全般に対しても大きな権限を握っていた。そのため、甘孜（カンゼ）一帯で影響力を有するゲダ 5 世を朱徳が表敬訪問し、実際に食糧調達の相談を行ったと考えられる。政府系資料『甘孜州志』は、ゲダ 5 世の白利（ペーリ）寺は紅軍に 3500 キログラムの食糧を支援したと記している［甘孜州志編集委員会編 1997:1310］。

紅軍を“悪魔”だと吹聴した高僧は誰だ

それは中華民国政府と契りを結んだ諾那（ノルラ）リンポチェ（1865-1936、リンポチェはチ

ベット語で高僧の意、以下ノルラ師）である（ノルラ師に関する記述は［陳声漢・石夾輔編著 2016］を参照）。ノルラ師は現在のチベット自治区昌都市類烏斉県出身、チベット仏教ニンマ派とカギュ派の学問を修めた後、蔣介石と手を組み数奇な人生を送った高僧である。ラサのチベット政府との間に強い確執を抱えていたノルラ師は、1930 年代、流暢な漢語を武器に上海や南京を拠点として、漢人にニンマ派の教義を授ける道場「諾那精舎」を開き、じわじわと中華民国政府に接近した［游有維 1988:128］。

1935 年に武漢にて、1936 年に成都にて、蔣介石との濃密な交流に成功したノルラ師は、南京国民政府の要請を受け、念願の「西康宣慰使」という官職を手に入れた。この時、蔣介石は西康地区（朱徳の紅軍部隊が通過した四川省の甘孜や炉霍等を含むチベット高原東部）の地理、政治、宗教を熟知しているノルラ師を、現地での軍事を含む各種情報の収集と反中国共産党活動の責任者に命じたのである。その際、活動資金として毎月 1 万 1 千元を支給し、200 余名の部隊指揮権も与えた。

図 15　国民党と契りを結んだノルラ・リンポチェ［陳声漢・石夾輔編著 2016:口絵］

こうして 1936 年に西康地区に乗り込んだノルラ師は、「中国共産党が率いる紅軍は悪魔だ！宗教を潰すぞ！さあ、民衆は逃げろ！協力するな！」と御布令を出し、紅軍部隊の北上を阻止する構えを見せた。ところが、ノルラ師が率いる兵力は、甘孜や炉霍の紅軍部隊に歯が立たず、瞻対というチベット人の村へ退散したところ、現地の支配者である土司に身柄を拘束された。その後、ノルラ師は紅軍の捕虜となったが、朱徳の進言を受け入れて改悛の情を示し、紅軍への協力姿勢に転じたもののあっけなく他界した。囚われの身となったノルラ師転向の真相は闇の中だが、今際の際に、国民党の側にいた自分の部下を西康地区で産声を上げた新たな“共和国”の指導者に指名した後、旅立ったのである。

波巴人民共和国は存在したのか

1936 年 5 月、紅軍が長征の真っただ中に、チベット人による民族自治の実現を謳った波巴人民共和国（以下共和国）を成立させたと聞けば、怪訝に思う人もいるだろう。中国共産党は紅軍が共和国を作ったと主張しているが、台湾の国史館所蔵史

料[6]には「偽卜巴共和国臨時政府準備会が作られた」「現地のチベット人を困惑させた」という記述があることから、歴史の虚実を見極めることは容易でない。筆者は、共和国の成立はあくまでも一時的なものにすぎず、活動の実態を伴わなかったと考えている。

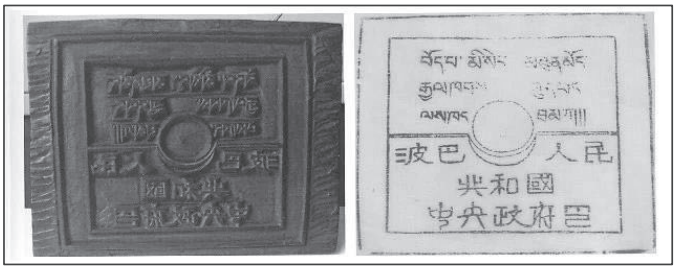

図 16　波巴人民共和国崩壊後、ゲダ 5 世が保管していたと伝えられる印章［中共甘孜州委党史研究室編 2016:73］

1936 年 4 月、朱徳の紅軍部隊が駐留する甘孜および隣接する徳格、炉霍、道孚等で、相次いで共和国の地方政府組織が誕生した。そして 5 月 1 日、甘孜で共和国の成立が宣言された日に、近隣 16 の県から約 700 人の関係者が集い、共和国中央政府の誕生を祝福した。

中国共産党史に基づいて作られた絵本『格達活仏』には、この大会でゲダ 5 世が共和国甘孜県波巴政府の副主席に選ばれ、壇上から朱徳が中国共産党の諸政策を語ったと書かれている（9 頁）。副主席の件は中国共産党が作成した多くの文献に触れられているが、『朱徳年譜（新編本）』によると、5 月 1 日から 3 日まで炉霍にて紅軍部隊の競技会が開かれ、朱徳が革命精神と長征の貫徹を訴えたとあり、共和国成立大会に出席したという記述はない。その理由は、張国燾（1897–1979）が主導した共和国の設立に朱徳が多少なりとも関与した事実を公表したくないからであろう。その上、中国共産党は長征途上では少数民族の“自決権”と民族共和国の建設を認めていたが、中華人民共和国建国後は、民族自決を否定する方向に転じたことも関係しているはずだ。

実は、この共和国誕生という政治劇の脚本を書いたのは、朱徳と長征を共にしていた張国燾という軍人であった。張は毛沢東の紅軍北上に反対して南下政策を主張し、後に国民党と協力して共産党批判を展開し、カナダに亡命したいわくつきの人物である。

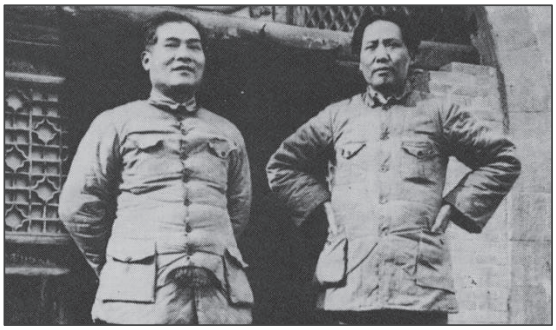

図 17　党の方針をめぐって毛沢東と対立した張国燾（左）。長征を終えた延安にて［エドガー・スノー1996:94］

彼は 1935 年に中華ソビエト共

和国西北連邦政府を組織し、少数民族政権を連邦内に加える構想を練っていた。一方、朱徳の関心は部隊の北上に備えて大量の食糧と防寒着を確保することにあり、共和国が掲げた土地改革（農耕地を地元の権力者から農民に与える）を巧みに利用して、農民に農作業に励むよう呼びかけたのである。朱徳と張国燾の行動から、各自の目的を実現する上で現地のチベット人を束ねるゲダ5世の協力が不可欠という考えを共有していたことがわかる。そこでゲダ5世は白利（ペーリ）寺のみならず西康地区の平和（後述）を確保することを念頭に置きながら、紅軍北上に向けた準備を率先して行い、少数民族独自の“政府”を支える指導者に就任することで、中国共産党の懐に飛び込んでいったのである。

共和国に関連するもう一つの重要な点は、波巴（ボバ）自衛軍、波巴（ボバ）革命党、波巴（ボバ）青年団等の組織が応急的に作られたことだ。目的はチベット人の若者を紅軍部隊に勧誘するためであった（[中共甘孜州委党史研究室編 1993:203-219] に資料あり）。

当時の共和国の実態に詳しい張国燾は、カナダに移住後、1970年に回顧録「我的回憶」を執筆し、香港の「明報月刊」に連載した。「在西康」の章には、西康地区へ来た目的は冬を越すための食糧確保であり、チベット人と漢族が食糧を激しく奪いあう緊迫した状況であったと記しているが、肝腎の共和国建設の顛末には全く触れていない [張国燾 1970:84-87]。このことから、結局のところ共和国は第四方面軍が衣と食と新兵を獲得する目的で作った“泡沫国家”であったと言わざるを得ない。

1936年7月初旬、いよいよ紅軍部隊が甘孜（カンゼ）を出発する際、朱徳はゲダ5世に「10年後、あるいは15年後に必ずここに戻ってくる」という芝居くさい台詞を残して、毛沢東が待つ陝西省北部を目指した。紅軍が去った直後、牙をといでいた国民党の兵士が共和国政府の関係者や紅軍に協力したチベット人を襲撃するという事件が相次ぎ、形だけの共和国はまたたくまに消滅した。

ゲダ5世はチベット進軍を支援したのか

朱徳の“予言”どおり、14年後に中国人民解放軍第18軍の北路先遣隊が甘孜（カンゼ）に到着した。先遣隊は中国共産党がチベットを解放するための予備調査隊であり、進軍の大義はイギリスを中心とする帝国主義勢力の圧力からチベットを解放することであった。先遣部隊を率いた52師団長の呉忠（1921-90）は、ベースキャンプを甘孜（カンゼ）に置き、中国共産党の民族政策や宗教政策を宣伝しつつ、チベット政府の動きを探った。ある日、呉忠は側近の天宝（1917-2008、当時党チベット工作委員会委員）を伴い、白利（ペーリ）寺のゲダ5世を訪ねた。

呉忠とゲダ 5 世の通訳を務めた天宝（本名サンギェ・イェシェ、天宝は毛沢東が命名）は現在の四川省馬爾康（マルカム）県の出身、1935 年 18 歳の時に紅軍に入隊したチベット人であり、チベット語と漢語に通じている。そして、少年期に寺で雑役僧をしていた経歴が、この時役立ったと考えられる［王超耀主編 1998:22-24］。

かつて長征に参加した呉忠と天宝は、寺に一週間泊まり込み、紅軍と朱徳の思い出話に花を咲かせた。その目的は、第 18 軍が金沙江を渡りラサを目指すには、ゲダ 5 世の協力を必要としたからだ。

図 18　1950 年代初、甘孜寺を背景にした天宝。後に、チベット族幹部として、中共四川省委員会書記に就任した［中共西蔵自治区委員会党史研究室編 2006:86］

中国共産党にとってチベット解放を成し遂げる上で最大の難題は、ラサにいるダライ・ラマ 14 世（1935-）に党のチベット政策を承認させることであった。呉忠はこの重大な任務をゲダ 5 世に依頼し、チベット人の天宝がチベット解放の意義と条件を詳細に説明して同意を得た。ゲダ 5 世はダライ・ラマの説得にあたる決意を北京の朱徳に電報で伝えると、朱徳から届いた返電には「チベットへ行き和平交渉にあたられるとのこと、立派な判断をうれしく思います」と記されていた［西蔵自治区党史資料徴集委員会編 1995:13］。

今回、チベット解放の使者としてゲダ 5 世に白羽の矢を立てたのは、1936 年に甘孜（カンゼ）で交流した“老紅軍”の戦略家である朱徳と劉伯承（1892-1986）であった。劉は中華人民共和国建国当初、西南軍政委員会（中央人民政府の指揮下で西南地方を管轄する六大地方政府の一つ）の主席に任命され、チベット進軍の準備を担当した軍人である。

ゲダ 5 世を殺害したのは誰だ

こうしてゲダ 5 世はチベット解放の使者として、1950 年 7 月に西南軍政委員会委員の身分で、従者とともに甘孜（カンゼ）を発ちラサを目指した。この時、先遣隊の呉忠はゲダの身に危険が及ぶことを心配して、アメリカ製のカービン銃二丁を手渡したと伝えられている［暁浩 1999:74］。最初の関門はチベット政府軍が待ちかまえる昌都（チャムド）という町であった。

当時昌都（チャムド）を統治していたチベット政府官僚のラルは、中国共産党の進軍に強く異

を唱え、ゲダのラサ行と甘孜（カンゼ）への帰還を妨害し、ゲダ一行の行動の自由を奪ったのである。業を煮やしたゲダは、ラサとの交信を試みようと町唯一の無線所へ向かった。その無線所の管理者は、チベット政府が雇ったイギリス人通信技士フォード（1923-2013、Robert W. Ford）であった。

1950 年 8 月 22 日、事もあろうにゲダ 5 世が昌都（チャムド）で殺害されるという大事件が起こった。殺害に関与したと疑われる人物は以下の 2 人である。

図 19　中国人民解放軍により捕虜となったフォード。軍が撮影する際、わざわざ皮のジャンパーを着せて西洋人であることを強調した［黄顯・劉洪記 2001:4 口絵］

（1）フォード（チベット政府に雇われたイギリス人通信技師）

事件から 4 ヶ月後、新華社が犯人と殺害方法を次のように報じた［新華社通訊編印 1959:140-141］。ゲダが無線所を訪問した際、フォードが毒を盛った茶（帝国主義の陰謀を象徴）をふるまった。するとゲダは腹と頭が痛み始め、黄色い液を吐き出し、耳から血と膿が流れ、手足が麻痺した。死後全身が黒ずみ、皮膚に触れるとすぐにはがれ落ちた。フォードは殺害の証拠を隠滅するため、ゲダの遺体を焼却し従者をラサへ移送した。

（2）ラル（チベット政府官僚、昌都（チャムド）の統治責任者）

ラルはゲダの変死について、次のように証言している［拉魯・次旺多吉 1995:114］。ある日病状が急変したため、現地の医師に診察を命じたところ、診断結果は「胃腸の激痛」であった。結局、ゲダは自ら持参した薬を服した夜に息を引きとった。

“毒”を仕込んだのはフォードなのかラルなのか。この場合は、上役のラルがフォードに殺害を命じたと見るのが自然であろう。

訃報を受けて、中国共産党と中国人民解放軍は、「祖国解放の闘いに殉じたチベットの英雄ゲダ 5 世」“殺害”の一件を重く受けと

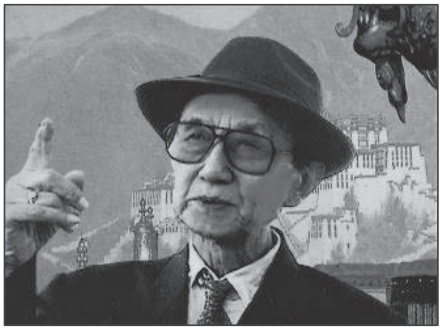

図 20　1950 年当時、昌都を支配していた官僚のラル。後に中国共産党の協力者となり、チベット自治区政治協商会議の副主席に就任した［五洲伝播音像出版社（発行年不明）：表紙］

め、即座にチベットへの進軍を開始したのである。

中国共産党の主張はこうである。チベット解放の使者として派遣したゲダ 5 世が、チベット政府に雇われたイギリス人スパイによって殺害された以上、中国共産党はイギリスを中心とする帝国主義勢力からチベットを解放する重大な任務を果敢に遂行しなければならない。つまり、中国共産党はゲダの殺害をチベット解放、チベット進軍の大義名分に都合よく利用したのである。

中国共産党により囚われたフォードは、“自白”を強要された後、10 年の禁固刑を言い渡されたが、最終的に当局の配慮で国外追放処分となった。命拾いしたフォードは、帰国後に出版した回顧録の中で、ゲダの死についてこう記している。「私としては、ゲダが暗殺されたと信じるに十分な理由を持っている。誰が殺したのかも、知っているつもりだ。その人が誰か、永久に発見されないことを祈るばかりである」［フォード 1959:91］。

本当の殺害犯はフォードか、ラルか、それとも中国共産党が送り込んだ刺客なのか。事実は歴史の闇に葬られたままである。

ゲダ 5 世は中国共産党を“熱愛”したのか

この問題を読み解くキーワードは、大白事件とノルラ師が唱えた「康人治康」政策であると筆者は考える。

(1) ダライ・ラマ政権の大金寺（タルギェ）と白利土司・白利寺（ベーリ）の確執

ゲダ 5 世が住持を務める白利寺（ベーリ）から西へ約 15 キロメートル進むと大金寺（タルギェ）（所在地：四川省甘孜チベット族自治州甘孜県卡攻郷）が見えてくる。両寺院はチベット仏教の中で最大規模のゲルク派に属し、甘孜（カンゼ）一帯ではライバル関係にある。ただし、大金寺（タルギェ）はダライ・ラマ 5 世（1617–82）の時代に、チベット政府が支配地域を西康地区に拡大するための戦略的な拠点として建立したものである。そこで甘孜（カンゼ）一帯の支配者である寺院や土司は、ダライ・ラマ政権を支える軍隊が、金沙江を渡って攻めて来ることを恐れていた。

1930 年、心配していた事件（大白事件）が起こった。大金寺（タルギェ）と白利（ベーリ）土司（白利地区の支配者）の間で僧や住民の帰属先をめぐる紛争が発生し、激しい武闘に発展したのである［呉彦勤 2007:104–112］。ダライ・ラマ政権は直ちにチベット軍を大金寺（タルギェ）に送り加勢した。一方、白利（ベーリ）土司は国民党を背後に持つ四川軍に支援を要請して戦ったが、屈強な僧兵、多数の銃、豊かな財力を有する大金寺（タルギェ）を相手に、白利（ベーリ）土司は苦戦を強いられた。こうして支配地と財産管理をめぐり、兵士、僧侶、農民が銃や弓矢を手に死闘を繰り広げたのである。

それから 5 年後、両者は矛を収めたが紛争の火種は残ったままであった。このような状況下で、ゲダ 5 世は大金寺（タルギェ）との確執から白利寺（ベーリ）の権益と地域の住民を守るため、中国共産党の紅軍部隊と協力関係を築くことにより、ラサに君臨する強大なダライ・ラマ政権から身を守る必要があったと考えられる。

(2) ノルラ師が目指した「康人治康」政策への共鳴

ノルラ師は甘孜（カンゼ）を中心とする西康地区の政教関係に通じており、蔣介石の信頼を得て、「西康宣慰使」という官職を手に入れた“怪僧”である。当初、紅軍を悪魔だと吹聴して武力攻撃に出たが、紅軍の捕虜となった後、西康地区にチベット人を中心とする新たな波巴（ボバ）人民共和国の建設を支援する態度を表明した。そして自らの部下やゲダ 5 世等、地元の有力者を西康各地の波巴（ボバ）政府指導者に指名した直後に生涯を終えたのである。

政治と軍事の世界に足を踏み入れたことで、血なまぐさいイメージがつきまとうノルラ師であるが、彼が終生掲げた理想は「康人治康」（西康の人間が西康地区を統治する）であった。西康地区をダライ・ラマ政権に奪われることなく、現地の歴史と特色を踏まえて自立した社会を築くという願いを持っていたのである。

ゲダ 5 世はノルラ師の「康人治康」という考えに共鳴し、西康地区の独立性を確保する目的で、紅軍長征とチベット解放という中国共産党の軍事行動を支援したのである。よって、ゲダ 5 世は中国共産党によって一方的に利用されたのではなく、愛する西康地区をダライ・ラマ政権の襲来から守り抜くために、中国共産党としたたかに協力関係を結んだと考えられる。

したがって、本稿のタイトルに掲げた“熱愛”には、ゲダ 5 世が中国共産党を後ろ盾として利用する意図が含まれており、中国共産党に全幅の信頼を寄せていたわけではない。このことは、甘孜を中心とする西康地区（東チベット）とダライ・ラマ政権が支配する中央チベットは、同じ宗教や民族文化を共有しているが、異なる統治形態によるライバル関係にあり、紛争が絶えなかったことを表している。

３．ゲダ 5 世“中華民族の英雄”に祭り上げられる朱徳総司令とゲダ 5 世記念館の塑像

2003 年、筆者が記念館を訪問すると、門はかたく閉ざされていた。管理人から、「鍵はゲダの縁者が持っており、見学するには甘孜（カンゼ）県政府旅游局の紹介状と縁者の承諾が必要だ」と告げられた。縁者が記念館の公開を歓迎しない理由は、ゲダと中国共産党が“戦略的互恵関係”にあった過去に触れられたくないからに相違ない。

筆者は直ちに旅游局を訪ねて紹介状を受け取ると、管理人を通じてゲダの縁者に連絡を入れてもらった。そして管理人と一緒に記念館の重いシャッターを持ち上げて中へ入ると、朱徳とゲダが斜めに向き合った塑像があった。江沢民が揮毫した台座の上で、二人の表情は堅く、ぎこちない雰囲気が漂っていた。台座には白いカタ（チベット人が客人を歓迎する時に渡す白いスカーフ状の布）が供えられていた。

図 21　旧記念館に設置された塑像（2003 年筆者撮影）

中国政府が朱徳とゲダの塑像を制作し記念館に安置した意図は、紅軍長征を援助しチベット解放に尽力したゲダ 5 世を顕彰し、軍人と高僧の「魚水之交」（互いに離れがたい親友関係）を通じて中国共産党とチベット族の融和を喧伝することにある。ただし、長征途上の甘孜（カンゼ）にて二人が親密な交流を行ったことを証明する史料はなく、ぎこちない表情をした塑像は、「魚水之交」の逸話には虚構の要素が含まれていることを暗に物語っている。

新記念館の前に立つ“中華民族”の英雄像

2003 年の訪問から 15 年後の 2018 年に、筆者は記念館を再訪した。すると、かつての旧館は閉鎖され、同じ敷地内に新館がオープンし、新たに朱徳とゲダの立像が設置されていた。新館の入り口には、ピカピカに磨き上げられたあの二人の塑像が鎮座し、相変わらず居心地が悪そうな表情を浮かべていた。

甘孜（カンゼ）の町中には、1930 年代の紅軍長征を称えるポスターやレリーフが派手に飾られ、甘孜（カンゼ）を民族団結と中国共産党の輝かしい足跡を讃える“紅色旅游”の町として売り出す準備に追われていた。

図 22　新記念館の前に設置された二人の立像。台座には「朱徳総司令和五世格達聯誼塑像」の文字が刻まれていた（2018 年筆者撮影）

新記念館の展示を見てわかったことは、中国共産党がゲダ 5 世を“二つの長征”つまり紅軍長征（第一の長征）とチベット解放（第二の長征）に尽力した“愛党愛国愛教”の英雄として統一戦線活動の宣伝に積極的に利用する意図を明らかにしたことであった。

習近平政権が謳う「中華民族（漢族と 55 の少数民族の統合）の偉大なる復興」のスローガンを受けて、新たに設置されたゲダと朱徳の立像は、ゲダを“二つの長征”を支援した“中華民族の英雄”として祭り上げる新たな役割を担ったと筆者は考える。

【注】

1)「長征勝利五十周年座談会」（1986 年 10 月 18 日、甘孜で開催）にて塑像計画が提案された［甘孜県志編纂委員会編 1999：27］。

2) 本稿はゲダ 5 世像に関する修正稿であるため、ゲダ 5 世の生涯に関する記述は、過去の拙論［川田 2004］［川田 2006］［川田 2007］［川田 2015］と重複する箇所がある。

3)「中国紅軍総政治部、甘孜喇嘛寺、白利喇嘛寺互助条約」（1936 年 4 月 12 日、陳昌浩、重撒、格達）。

4)「紅軍為保護喇嘛寺的布告」（1936 年 4 月 17 日、陳昌浩、李先念）。

5)暁浩「我所知道的格達活仏和甘孜白利寺」（2005 年 12 月 8 日）、「新華網山東頻道」http://sd.xinhuanet.com/life/2005-12/08/content_5769403.htm（2006 年 6 月 1 日閲覧）

6)「顧祝同電蔣中正共軍假借甘孜德欽汪母香根佛等十二人名義成立偽卜巴人民共和國臨時政府籌備會其布告多煽惑青康藏人民謬詞並有久據西康企圖等文電日報表等二則」国史館典藏號 002-080200-00470-132、1936 年 5 月 10 日。

【参考文献】

エドガー・スノー1996　『抗日解放の中国（新装版）』ロイス・ホイーラー・スノー編、高橋正訳、サイマル出版会

川田進 2004　「活仏と共産党を結ぶ「紅い」絆――格達五世と朱徳」、『火鍋子』61

川田進 2006　「電視劇「格達活仏」に見る虚々実々の英雄像――白利寺ゲダ五世の死と再生」『火鍋子』64

川田進 2007　「ゲダ 5 世に見る中国共産党のチベット政策と統一戦線活動」、『大阪工業大学紀要 人文社会篇』 52(1)

川田進 2015　「「愛国活仏」ゲダ五世の虚実と軍の宗教政策」、『東チベットの宗教政策』北海道大学出版会

フォード 1959　『赤いチベット』近藤等訳、新潮社、原題 Captured in Tibet

陳声漢・石夾輔編著 2016　『先駆』中央民族大学出版社
甘孜日報 2016　「摯友」、『甘孜日報康巴周末』9 月 3 日
甘孜県志編纂委員会編 1999　『甘孜県志』四川科学技術出版社
甘孜州志編集委員会編 1997　『甘孜州志』四川人民出版社
黄顥・劉洪記 2001　『西蔵 50 年歴史巻』民族出版社
拉魯・次旺多吉 1995　「格達活仏到昌都和談」、西蔵自治区政協文史資料研究委員会編『西蔵文史資料選輯 16 拉魯家族及本人経歴』、民族出版社
順書 2019　「中国精神四川人物之五世格達活仏」、『四川統一戦線』8
王超耀主編 1998　『雪山草地紅軍人物』西南交通大学出版社
五洲伝播音像出版社（発行年不明）『西蔵人物　昔日貴族　飄拂的紫袈裟』五洲伝播音像出版社
呉彦勤 2007　『清末民国時期川蔵関係研究』雲南人民出版社
暁浩 1999　『西蔵，1951 年――人民解放軍進蔵実録』民族出版社
西蔵自治区党史資料徴集委員会編 1995　『中共西蔵党史大事記 1949-1994』西蔵人民出版社
新華社通訊編印 1959　「西南軍政委員会委員格達惨遭英帝特務分子毒害身死」（1950 年 12 月 3 日新華社）、『有関西蔵問題的文件和材料選集（国内部分、1949-1959）』
楊飛 2010　「天宝与格達活仏同心献力西蔵解放」、『四川統一戦線』1
游有維 1988　『上海近代仏教簡史』華東師範大学出版社
周錫銀 2012　『為西蔵和平解放而献身的格達活仏』民族出版社
張国燾 1970　「我的回憶　在西康（第 19 編第 1 章）」『明報月刊』5（総 53）
中共西蔵自治区委員会党史研究室編 2006　『天宝与西蔵』中共党史出版社
中共中央党史研究室第一研究部編 2006　『紅軍長征史』中共党史出版社
中共中央文献研究室編 2006　『朱徳年譜（新編本）』（上中下）、中央文献出版社
中共甘孜州委党史研究室編 1993　『紅軍長征在甘孜蔵区』成都科技大学出版社
中共甘孜州委党史研究室編 2016　『図説長征・紅色甘孜』中共甘孜州委党史研究室

【謝辞】
本研究は科研費 16K02022、20K12337、18H00718 の助成を受けたものである。